

山男の四月

宮沢賢治

青空文庫

山男は、金いろの眼めを皿さらのようにし、せなかをかがめて、にしね山のひのき林のなかを、
 兎うさぎをねらつてあるいていました。

ところが、兎はとれないで、山鳥がとれたのです。

それは山鳥が、びつくりして飛びあがるとこへ、山男が両手をちぢめて、鉄砲てっぽうだまの
 ようにからだを投げつけたものですから、山鳥ははんぶん潰つぶれてしまいました。

山男は顔をまつ赤にし、大きな口をにやにやまげてよろこんで、そのぐったり首を垂れ
 た山鳥を、ぶらぶら振りまわしながら森から出てきました。

そして日あたりのいい南向きのかれ芝しばの上に、いきなり獲物えものを投げだして、ばさばさの
 赤い髪毛かみけを指でかきまわしながら、肩かたを円かたくしてごろりと寝ねころびました。

どこかで小鳥もチツチツと啼なき、かれ草のところどころにやさしく咲いたむらさきいろ
 のかたくりの花もゆれました。

山男は仰向けあおむになつて、碧あおいあおい空をながめました。お日さまは赤と黄金きんでぶちぶ
 ちのやまなしのよう、かれくさのいいにおいがそこらを流れ、すぐうしろの山脈では、雪
 がこんこんと白い後光をだしているのです。

(飴あめというものはうまいものだ。天道てんとは飴をうんとこきえているが、なかなかおれにはくれない。)

山男がこんなことをぼんやり考えていますと、その澄すみ切った碧いそらをふわふわうるんだ雲が、あてもなく東の方へ飛んで行きました。そこで山男は、のどの遠くの方を、ごろごろならしながら、また考えました。

(ぜんたい雲というものは、風のぐあいで、行ったり来たり。ほかと無くなってみたり、俄にわかにまたでてきたりするもんだ。そこで雲助とこういうのだ。)

そのとき山男は、なんだかむやみに足とあたまが軽くなって、逆さまに空気のなかにかぶような、へんな気もちになりました。もう山男こそ雲助のように、風にながされるのか、ひとりでに飛ぶのか、どこというあてもなく、ふらふらあるいていたのです。

(ところがここは七つ森だ。ちゃんと七つつ、森がある。松まつのいっばい生えてるのもある、坊主ぼうずで黄いろなものもある。そしてここまで来てみると、おれはまもなく町へ行く。町へはいつて行くとすれば、化けないとなぐり殺される。)

山男はひとりでこんなことを言いながら、どうやら一人ひとりまえの木樵きせりのかたちに化けました。そしたらもうすぐ、そこが町の入口だったので。山男は、まだどうも頭があんまり

軽くて、からだのつりあいが悪くならないとおもいながら、のそのそ町にはいりました。

入口にはいつもの魚屋があつて、塩しお鮭ぎけのきたない俵たわらだの、くしゃくしゃになった鰯いわしのつらだのが台にのり、軒のきには赤ぐろいゆで章魚だこが、五つつるしてありました。その章魚を、もうつくづくと山男はながめたのです。

(あのいぼのある赤い脚あしのまがりぐあいは、ほんとうにりっぱだ。郡役所の技手ぎての、乗馬ずぼんをはいた足よりまだりっぱだ。こういうものが、海の底の青いくらいところを、大きく眼をあいてはつているのはじつさいえらい。)

山男はおもわず指をくわえて立ちました。するとちようどそこを、大きな荷物をしよつた、汚きたない浅黄服あさぎふくの支那人しなが、きよろきよろあたりを見まわしながら、通りかかつて、いきなり山男の肩をたたいて言いました。

「あなた、支那反物たんものよろしいか。六神丸ろくしんがんたいさんやすい。」

山男はびつくりしてふりむいて、

「よろしい。」とどなりましたが、あんまりじぶんの声がかかたかたのために、円い鉤かぎもち、髪をわけ下駄げたをはいた魚屋の主人や、けらを着た村の人たちが、みんなこつちを見ているのに気がついて、すっかりあわてて急いで手をふりながら、小声で言い直しました。

「いや、そうだない。買う、買う。」

すると支那人は

「買わない、それ構わない、ちよつと見るだけよろしい。」

と言いながら、背中の荷物をみちのまんなかにおろしました。山男はどうもその支那人のぐちやぐちやした赤い眼が、とかげのようでへんに怖こわくてしかたありませんでした。

そのうちに支那人は、手ばやく荷物へかけた黄いろの真さなだひも田紐かみほこをといてふるしきをひらき、行李こつりの蓋ふたをとつて反物のいちばん上にたくさんならんだ紙かみほこ箱この間から、小さな赤い薬くすりびん瓶びんのようなものをつかみだしました。

（おやおや、あの手の指はずいぶん細いぞ。爪つめもあんまり尖とがっているしいよいよこわい。）

山男はそつとこうおもいました。

支那人はそのうちに、まるで小指ぐらいあるガラスのコップを二つ出して、ひとつを山男に渡わたしました。

「あなた、この薬のむよろしい。毒ない。決して毒ない。のむよろしい。わたしさきのむ。心配ない。わたしビールのむ、お茶のむ。毒のまない。これながいきの薬ある。のむよろしい。」支那人はもうひとりでかぶつと呑のんでしまいました。

山男はほんとうに呑んでいいだろうかとあたりを見ますと、じぶんはいつか町の中でなく、空のように碧いひろい野原のまんなかに、眼のふちの赤い支那人とたった二人、荷物を間に置いて向かいあつて立っているのです。二人のかげがまつ黒に草に落ちました。

「さあ、のむよろしい。ながいきのくすりある。のむよろしい。」支那人は尖った指をつき出して、しきりにすすめるのです。山男はあんまり困ってしまつて、もう呑んで遁にげてしまおうとおもつて、いきなりぷいっとその薬をのみました。するとふしぎなことには、山男はだんだんからだのでこぼこがなくなつて、ちぢまつて平らになつてちいさくなつて、よくしらべてみると、どうもいつかちいさな箱のようなものゝ變つて草の上に着ちているらしいのです。

(やられた、畜ちく生しょう、とうとうやられた、さつきからあんまり爪が尖つてあやしいとおもつていた。畜生、すつかりうまくだまされた。)山男は口惜くしやがってばたばたしようとしましたが、もうただ一箱の小さな六神丸ですからどうにもしかたありませんでした。

ところが支那人のほうは大よろこびです。ひよいひよいと両脚をかわるがわるあげてとびあがり、ぼんぼんと手で足のうらをたたきました。その音はつづみのように、野原の遠くのほうまでひびきました。

それから支那人の大きな手が、いきなり山男の眼の前にでてきたとおもうと、山男はふらふらと高いところへのぼり、まもなく荷物のあの紙箱の間におろされました。

おやおやおもっているうちに上からばたと行李の蓋が落ちてきました。それでも日光は行李の目からうつくしくすきとおつて見えました。

(とうとう　^{ろう}におれははいった。それでもやつぱり、お日さまは外で照っている。) 山男はひとりでこんなことを呟^{つぶや}いて無理にかなしいのをごまかそうとしました。するとこんどは、急にもつとくらくらくなりました。

(ははあ、風呂敷^{ふろしき}をかけたな。いよいよ情けないことになった。これから暗い旅になる。) 山男はなるべく落ち着いてこう言いました。

すると愕^{おど}ろいたことは山男のすぐ横でものを言うやつがあるのです。

「おまえさんはどこから来なすったね。」

山男ははじめぎくつとしましたが、すぐ、

(ははあ、六神丸というものは、みんなおれのようなぐあい人間^{人間}が薬で改良されたものだ。よしよし、)と考えて、

「おれは魚屋の前から来た。」と腹に力を入れて答えました。すると外から支那人が嘔^かみ

つくようにどなりました。

「声あまり高い。しずかにするよろしい。」

山男はさつきから、支那人がむやみにしやくにさわってしまいましたので、このときはもう一ぺんにかつとしてしまいました。

「何だと。何をぬかしやがるんだ。どろぼうめ。きさまが町へはいったら、おれはすぐ、この支那人はあやしいやつだとどなつてやる。さあどうだ。」

支那人は、外でしんとしてしまいました。じつにしばらくの間、しいんとしていました。山男はこれは支那人が、両手を胸で重ねて泣いているのかなともおもいました。そうしてみると、いままで峠とうげや林のなかで、荷物をおろしてなにかひどく考え込んでいたような支那人は、みんなこんなことを誰たれかに云いわれたのだなど考えました。山男はもうすっかりかあいそうになって、いまのはうそだよと云おうとしていましたら、外の支那人があわれなしわがれた声で言いました。

「それ、あまり同情ない。わたし商売たたない。わたしおまんまたべない。わたし往生する、それ、あまり同情ない。」山男はもう支那人が、あんまり気の毒になってしまつて、おれのからだなどは、支那人が六十銭もうけて宿屋に行つて、鯛いわしの頭や菜じるつ葉汁をたべる

かわりにくれてやろうと思いなから答えました。

「支那人さん、もういいよ。そんなに泣かなくてもいいよ。おれは町にはいったら、あまり声を出さないようにしよう。安心しな。」すると外の支那人は、やっと胸をなでおろしたらしく、ほおという息の声も、ぽんぽんと足を叩いている音も聞こえました。それから支那人は、荷物をしよつたらしく、薬の紙箱は、互にがたがたぶつつかりました。

「おい、誰だい。さつきおれにものを云いかけたのは。」

山男が斯う云いましたら、すぐとなりから返事がきました。

「わしだよ。そこでさつきの話のつづきだがね、おまえは魚屋の前からきたとすると、いま鱸が一匹いくらするか、またほしたふかのひれが、十兩に何片くるか知ってるだろうな。」

「さあ、そんなものは、あの魚屋には居なかつたようだぜ。もつとも章魚はあつたがなあ。あの章魚の脚つきはよかつたなあ。」

「へい。そんないい章魚かい。わしも章魚は大すきでな。」

「うん、誰だつて章魚のきれいな人はない。あれを嫌いなくらいなら、どうせろくなやつじゃないぜ。」

「まったくそうだ。章魚ぐらいいりっぱなもの、まあ世界中にないな。」

「そうさ。お前はいつたどこからきた。」

「おれかい。上海だよ。」

「おまえはするとやつぱり支那人だろう。支那人というものは薬にされたり、薬にしてそれを売ってあるいたり気の毒なものだな。」

「そうでない。ここらにあるいてるものは、みんな陳ちんのようないやしいやつばかりだが、ほんとうの支那人なら、いくらでもえらいいりっぱな人がある。われわれはみな孔子こうしせいじん聖人の末なのだ。」

「なんだかわからないが、おもてにいるやつは陳というのか。」

「そうだ。ああ暑い、蓋ふたをとるといいなあ。」

「うん。よし。おい、陳さん。どうもむし暑くていかんね。すこし風を入れてもらいたいな。」

「もすこし待つよろしい。」陳が外で言いました。

「早く風を入れないと、おれたちはみんな蒸むれてしまう。お前の損になるよ。」すると陳が外でおろおろ声こゑを出しました。

「それ、もとも困る、がまんしてくるよろしい。」

「がまんも何も無いよ、おれたちがすきでむれるんじゃないんだ。ひとりでにむれてしま
うさ。早く蓋をあけろ。」

「も二十分まつよろしい。」

「えい、仕方ない。そんなら少し急いであるきな。仕方ないな。ここに居るのはおまえ
だけかい。」

「いいや、まだたくさんいる。みんな泣いてばかりいる。」

「そいつはかあいそうだ。陳はわるいやつだ。なんとかおれたちは、もいちどもの形に
ならないだろうか。」

「それはできる。おまえはまだ、骨まで六神丸になつていないから、丸薬さえのめばもと
へ戻る。おまえのすぐ横に、その黒い丸薬の瓶びんがある。」

「そうか。そいつはいい、それではすぐ吞のもう。しかし、おまえさんたちはのんでもだめ
か。」

「だめだ。けれどもおまえが呑んでもとの通りになつてから、おれたちをみんな水に漬つけ
て、よくもんでもらいたい。それから丸薬をのめばきつとみんなもとへ戻る。」

「そうか。よし、引き受けた。おれはきつとおまえたちをみんなもとのようにしてやるからな。丸薬というのはこれだな。そしてこっちの瓶は人間が六神丸になるほうか。陳もさつきおれといつしよにこの水薬をのんだがね、どうして六神丸にならなかつたろう。」

「それはいつしよに丸薬を呑んだからだ。」

「ああ、そうか。もし陳がこの丸薬だけ呑んだらどうなるだろう。変らない人間がまたもとの人間に変わるとどうも変だな。」

そのときおもてで陳が、

「支那たものよろしいか。あなた、支那たもの買うよろしい。」

と云う声がしました。

「ははあ、はじめたね。」山男はそつとこう云つておもしろがっていましたが、俄かに蓋があいたので、もうまぶしくてたまりませんでした。それでもむりやりそっちを見ますと、ひとりのおかつぱの子供が、ぽかんと陳の前に立っていました。

陳はもう丸薬を一つぶつまんで、口のそばへ持つて行きながら、水薬とコップを出して、「さあ、呑むよろしい。これながいきの薬ある。さあ呑むよろしい。」とやっています。

「はじめた、はじめた。いよいよはじめた。」行李こつりのなかでたれかが言いました。

「わたしビール呑む、お茶のむ、毒のまない。さあ、呑むよろしい。わたしのむ。」
そのとき山男は、丸薬を一つぶそつとのみました。すると、めりめりめりめりつ。

山男はすっかりもとのような、赤髪あかがみの立派なからだになりました。陳はちやうど丸薬を水薬といつしよにのむところでしたが、あまりびつくりして、水薬はこぼして丸薬だけのみました。さあ、たいへん、みるみる陳のあたまがめらあつと延びて、いままでの倍になり、せいがめきめき高くなりました。そして「わあ。」と云いながら山男につかみかかりました。山男はまんまるになつて一生けん命遁にげました。ところがいくら走ろうとしても、足がから走りということをしているらしいのです。とうとうせなかをつかまれてしまいました。

「助けてくれ、わあ、」と山男が叫さけびました。そして眼をひらきました。みんな夢ゆめだったのです。

雲はひかつてそらをかけ、かれ草はかんばしくあたたかです。

山男はしばらくぼんやりして、投げ出している山鳥のきらきらする羽をみたり、六神丸かみばこの紙箱かみばこを水につけてもむことなどを考えていましたがいきなり大きなあくびをひとつし
て言いました。

「ええ、畜生、夢のなかのこった。陳も六神丸もどうにでもなれ。それからあくびをもひとつしました。」

青空文庫情報

底本：「注文の多い料理店」新潮文庫、新潮社

1990（平成2）年5月25日発行

1997（平成9）年5月10日17刷

初出：「イーハトヴ童話 注文の多い料理店」盛岡市杜陵出版部・東京光原社

1924（大正13）年12月11日

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005年2月21日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

山男の四月

宮沢賢治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>